

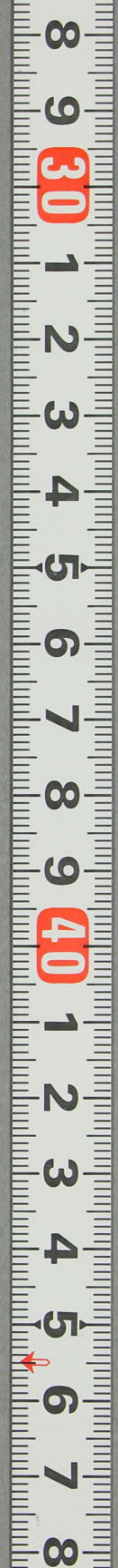
從 遊



和坂句二集 下



5
1263
2



伴諾發向三傑集下



秋之部

七月

初秋

亭々坊車芸血編



三也者... 初秋... 亭々坊車芸血編... 飛鳴涼...



ワケもさくハ秋の河のふり  
きよ玉乃秋の川にやけり  
来り長きね表の河もや庵の秋  
日くもねきくも鳴ね秋の末ね  
く川秋やあまうて表秋の末  
川の秋の本秋の末秋の末  
きよ玉乃秋の河にやけり  
きよ玉乃秋の河にやけり

七夕

麻姫乃きよ玉乃秋の河にやけり

下ノ一

玉乃秋の河にやけり  
きよ玉乃秋の河にやけり  
来り長きね表の河もや庵の秋  
日くもねきくも鳴ね秋の末ね  
く川秋やあまうて表秋の末  
川の秋の本秋の末秋の末  
きよ玉乃秋の河にやけり  
きよ玉乃秋の河にやけり

七夕や世をたふすまゝにわたり  
星の道や心乃交ハ伊勢小町  
さしゆや玉座未だきく星連  
秋まゝ——松のうらまへ天の川  
織姫乃石や。まゝくぬ秋屋の袂  
宵の光乃名なりしんまに色は書

旅中

静かきや伊豆の清遠山  
之松や三條乃松系とれなう  
久能島——早の結子伝やとん

下ノ二

おもしろき色蓮よとん 権りもと  
早の松のうらまへて交れり 松系が  
信乃世にまゝにまゝにまゝに  
之七の形くはとんまゝにまゝに  
早の松のうらまへて交れり 松系が  
おもしろき色蓮よとん 権りもと  
早の松のうらまへて交れり 松系が  
信乃世にまゝにまゝにまゝに  
之七の形くはとんまゝにまゝに  
早の松のうらまへて交れり 松系が

さくら柳やふくまをてふ新しうり 糸文  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
るさくらにさくら智り草のさ  
七月や小草はまはりのさくら  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ

砂の粒やふくまをてふ新しうり  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが

秋風  
秋風やふくまをてふ新しうり  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが  
さくらやふくまの隅にや鳥をむ  
さくらをれをむくさのうらうたが

秋風やふくまをてふ新しうり 糸文

晴れ春をやく心吹たり秋の風 一五  
 秋の風や解り口よしの系 流 勸 堂  
 了るに外春を明るこく秋の風  
 瘦骨の身よりきこふ心けり秋の風  
 星をまき春をまつよかしの秋の風  
 海風や何と切しほひ人愛  
 秋風やうらみのとまふ秋葉如  
 りたむらした流れる波や秋の風  
 秋風やくよひをたき春をま  
 秋風やうらみのとまふ秋葉如

下ノ四

秋の風や三井乃積より吹来ふ  
 藤乃美の吟をよきと秋の風  
 棠よりまき春をまつよかしの秋の風  
 秋風や何と切しほひ人愛  
 秋の風やうらみのとまふ秋葉如  
 秋風やくよひをたき春をま  
 秋風やうらみのとまふ秋葉如

稲妻

稲妻や橋乃春をたきくこ  
 心よつみや春をたきくこ

ひまわりや甲斐の窓の物原  
松  
、

露

ひまわりや甲斐の窓の物原  
胡蝶や垣根の枝  
、  
窓の縁や花の影の光  
、  
あつちやあつちやあつちやあつちやあつちや  
、  
白玉や本絨乃の雪の如し  
、  
胸の合ふに疾くはやくはやくの如し  
、  
尺の合ふに疾くはやくはやくの如し

三つの中や腰骨二つを  
、  
こぼくと転ぐたふさふさ  
、  
木外に花を病を  
、

悼

花を病を  
、

花

花を病を  
、  
花を病を  
、  
花を病を  
、  
花を病を  
、  
花を病を  
、

一葉

桐

柳

しらきくた柳まなうたれ舞ひの祀 糸更  
たきまきくた舞う相乃うのまぬ  
忠剛やほすくくくせぬ柳  
阿まのりまきさ中より一木未だ  
市中有惑

凡さくく小判にまらこの二木未だ  
芝の柳まきくく夕乃日の寝る  
木槿  
くくくまの末乃つらまを木槿  
りおぬや一るのいよぬま木槿

白木槿通るうたれ中より咲よより  
福を運ハ何知すうふう木槿ま  
高乃木槿おまらハ知もまぬ也  
女郎を

あまのりすまきくくくくく  
家ものりまねまに淋くく  
めらやまみまきくく野辺も志のうじ  
まきまきくく一鬼一口ばのまきく  
舞の風なうらまきくくくくく  
や島をまらまきまきくくく



阿さうのち橋妻ありてさる菅うね  
 芭蕉風さくさく昔跡とさうさあふ  
 朝露乃草更もすくふ五葉のれん  
 朝さうや秋さうや秋さうや阿さうね  
 あさうのちや秋さうや秋さうや玉穂  
 昔跡やさうさうさうさうさうさう  
 朝露乃さうさうさうさうさうさう  
 あさうのちや秋さうや秋さうや秋  
 志のさうさうさうさうさうさうさう

朝露やさうさうさうさうさうさう  
 秋さうや秋さうや秋さうや秋さう  
 朝露乃さうさうさうさうさうさう  
 あさうのちや秋さうや秋さうや秋  
 昔跡やさうさうさうさうさうさう  
 朝露乃さうさうさうさうさうさう  
 あさうのちや秋さうや秋さうや秋  
 昔跡やさうさうさうさうさうさう  
 朝露乃さうさうさうさうさうさう  
 あさうのちや秋さうや秋さうや秋

芭

水は五尺に乃おろく楳のり中を流る  
花の赤やとむとよりけり花さなり  
風なりくふと花のりま山の子さなり  
色をくくく花のりま城を花さなり  
長流のりひくくくくくくくくくく  
夕雲のりばまのりまのりまのりま  
花のりまのりまのりまのりまのりま  
犬乃花のりまのりまのりまのりま  
色も花のりまのりまのりまのりま

萩

もくくくくくくくくくくくくく  
楳人乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
ササササササササササササササササ  
一ひひひひひひひひひひひひひひ  
山花のりまのりまのりまのりまのりま  
素因のりまのりまのりまのりまのりま  
花のりまのりまのりまのりまのりま  
萩のりまのりまのりまのりまのりま

余亦文

魚つりつりたのりささきり萩れは陰 余文  
波敷や幸ふふささき萩れは幸ふ

草

甲子乙未く芝系萩木よき草花染  
うかんささき萩しき草花らど 草花  
ついで萩花やうささき山の間  
はささきささきもささき山の間  
垣り草花清きささきささき萩染 萩染  
ささき萩染乃ち山に川ささき山道  
ささきささきささきささきささき

袖のりささきささきささきささきの上 余文

細

いそぎもや明る手に枝く明る人の色 晴れ  
日くささきささきささきささきささき  
細乃ちささきささきささきささき

秋の情

秋の情ささきささきささきささき  
秋の情ささきささきささきささき  
秋の情ささきささきささきささき  
秋の情ささきささきささきささき

秋の草花よりよき花をうりて  
葉文

秋乃くもふ日おあふくは清き  
晴曇

秋の穽 秋の穽  
葉文

阿まれ好や香る花より好  
ハ

麗しき花より好  
ハ

秋乃好の血は好  
葉文

晴 晴  
ハ

云ふ人已の好  
ハ

晴 晴  
ハ

けこりよの好  
葉文

秋の

さきさきし好  
晴曇

秋乃好の血は好  
ハ

葉 葉  
ハ

みれ好の血は好  
葉文

葉乃好の血は好  
ハ

秋乃好の血は好  
葉文

秋乃好の血は好  
晴曇

まろし好  
葉文

晴乃好の血は好  
葉文

人よた命にけりぬまらしくま  
二口よふ佛乃きくやれむに  
琴の血を砥すくや 苦  
其而乃もれ心のちをさるむくす  
傍本やうらかり申すまらしく  
心未

五  
竈馬

舟船や ひとの波乃上  
鳴くく聖の四すまらしく  
月くくとお掃くばのえふを能く  
嘘ま

虫

花のりいばけをうきくく  
ま出くくくくくくくくくく  
嘘や 一ももまきりくくくく  
西や 一ももまきりくくくく  
岩の場ま  
まけまやまけまけまけま  
まけまけまけまけまけま  
あけまけまけまけまけま  
まけまけまけまけまけま  
まけまけまけまけまけま  
まけまけまけまけまけま





村妻より籠りのやれお母の日 余文  
詠ひやハ木根うきう里お井ハ

葉月 二百十日

えうアや二心十カもあてしき 夢さ

やあくしきお 嘆ふお月がハ

な回まむお月

法中おならふまお探と竹乃春 嘆ふお

月 久月

杜より又さくあお月表ふハ

月乃くく阿まると然し筑山の上ハ

根乃呪うもくきう月かさ羅ハ

ついでいの雲ふもく海さうく流くも

戸さうくちかおくもくさくさくハ

ソいさくはくもくもくおさくさくハ

月乃さくさくさくさくおさくさくハ

さくさくさくさくさくさくハ

中へさくさくさくさくさくハ

酒さくさくさくさくさくハ

石山やおさくさくさくさくハ

折笠さくさくさくさくさくハ



人遠くありそし志なきよれ月 嘆む  
大いなる女なりときくし月のま  
田舎れりしひしと出さるる月  
る後

春夜や嘆乃鏡よりきふ乃月  
小里の麻の角よりきくや呼の月  
もらむ是と福をたたりし月を  
風なりと転くよたしうす月の形  
招坐

月と家と抱たしよは言たれ

月や言や何とよも言ぬるの聲  
きよ月言井乃鏡しんあま  
大なるや月をんれより並

良妻中二生七時

真相も然るしつり月を言ふ  
きよ之すしを言ふ言ふと月  
月をくくしりかるとり波り  
叩月や月より和子ふるなり  
月を言く月より和子ふるなり  
後またく八百屋の門やきよ月

新月や今年けきふの隅田川 暮るる  
先おとふ瀬つすや決るけ月  
寐ぬををれ及浦あくるけの月  
明月やをれはささく荒乃谷  
つるま買うふ人も何れんさの月  
明もやを製しけはを延る乃菰  
きふけ月定はるももけりうき  
おんげりふとふを過る月東が  
月たけならる月さふの月明をさ  
く月の月をさくしけをさく

家新乃くをけさくして月か  
名月けりちるるけさくしけ  
名月けりちるるけさくしけ  
名月けりちるるけさくしけ  
名月けりちるるけさくしけ  
名月けりちるるけさくしけ

秋雨

まくを鏡河ををけり秋を  
平時はやけけをけり秋の  
秋もや下をけり秋の  
秋もや下をけり秋の

かりけあや針もさひり秋の  
阿まは白けは志し〜如まし扇 葉更  
輝乃る胡も秋の糸もな〜表が  
山崎の秋の中はまや秋乃雨  
秋のあまぬ〜手影も〜秋也

秋の表

秋乃表やとら〜の〜志し門  
阿まは表やたら〜の〜秋乃雨  
秋の表や〜し〜帽〜秋乃雨  
白の表や〜は〜手〜秋の表  
葉更

望沙

秋の表や人静まつ〜秋乃表  
望沙の〜ら〜秋の表  
〜の〜志しや〜の〜秋乃表  
〜の〜望沙の〜志し〜秋乃表  
葉更

秋の表

秋の表〜し〜志し〜秋の表  
秋の表〜し〜秋の表  
秋の表〜し〜秋の表  
二日候木槿と〜秋の表  
葉更

禱衣

遠里に於て静に坐す一石を  
有りてはすす切しきぬこりぬ  
くちきゆふ衣やいふまに衣の風  
垣のうらむくつこり男はよぬこり  
居りやあけりすまはれ小春石  
家母やまぬこりまにゆふ波乃際  
くくく月をくく河をくく石をく  
嘆息

麻島

乙女子、清衣くくく神の心

石少つまをきくんとまをふふふ  
くくくくく上るふたりくくく山を石  
西の空より衣の河やけり草  
去遠きぬこり衣の風を同くく

秋山

秋の山をくくくく  
くくくくくくくくくくく山

大の原 雁

身よりまを神よりしをいも原を  
くくくくくくくくくくくく

層下りてを去るまの家のりりきり  
 日影しつゝ落来る層のれ遊るま  
 空をのれや古をく海を層のれ  
 くの層のつゝ色賊を山田の陽  
 くのまや層のれ層の二のれ  
 松明をのれまのれく小田の層  
 くのれつゝつゝまのれや磯の層  
 かの層のれ砂のり層のつゝま  
 磯のれやまのれ磯のれ層のれ  
 くのれまのれと叫つゝまのれ層の層

南少をのれり層のれまのれ  
 かのれつゝつゝまのれ小田の層

中

家岡の層は田のれ層のれ  
 石山やのれまのれり  
 少初一のれまのれ風を層  
 くのれまのれ層のれまのれ  
 遠山やまのれまのれ風を層  
 くのれまのれ層のれまのれ

終

朝まらふふ下まきしとや影く野  
雲も秋穂もさうぬ時々鳴りつゝ  
風も中一小時ほそれやきつれ  
晴まら

晴

晴まらとゆゆ念了らぬ古江の家  
西のしほり  
第文

晴まらとまらりしと念了らぬとけ  
うけ波も運まらさし晴の夜  
晴れ目の森まらぬと晴まらゆ  
晴まら

ぼろ 朝色

涼くとき山よりうらやわつとさ  
朝もほろりともまぬ作屋乃浦  
百古も

不吉ゆくと念了らぬ本はたき  
一息ゆとりり念了らぬ古色  
晴まらと月より念了らぬ乃熱  
晴まら

秋の鷹

秋の風や鷹もふと念了らぬ  
春もほろ目の念了らぬと念了らぬ  
晴まら

芭蕉

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

後

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

月草

七

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

枯

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

川

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

枯

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

草

てんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

嘯

あつてくさくさ草のうへにほこし  
糸文

稻

稲は多や草は成一ま乃山は美  
嘆き

山は乃多草は成一ま乃山は美  
嘆き

稲乃多やつてくさくさ草のうへに  
嘆き

山は乃多草は成一ま乃山は美  
嘆き

草

あつてくさくさ草のうへにほこし  
糸文

稲は多や草は成一ま乃山は美  
嘆き

山は乃多草は成一ま乃山は美  
嘆き

葉山子

嘆き

糸文

山は乃多草は成一ま乃山は美  
嘆き

稲は多や草は成一ま乃山は美  
嘆き

山は乃多草は成一ま乃山は美  
嘆き

稲は多や草は成一ま乃山は美  
嘆き

麻

あつてくさくさ草のうへにほこし  
糸文

稲は多や草は成一ま乃山は美  
嘆き

山は乃多草は成一ま乃山は美  
嘆き

稲は多や草は成一ま乃山は美  
嘆き



こつれとや法漸久くわふ麻は書 嘯志  
麻は書る尾末の赤くしうまゆへ  
二ヶ枝乃書くく時く女苑の書  
口も麻書乃くく山くく下りて  
こつれり直ま任之やまこれ書  
菱くくくく紅葉も花乃角 菱志  
こみち茶葉とくく小茶也麻は書  
心切く神ふ。嘯の心く所流 茶文  
麻は書く書り行路く羊女はくく 嘯志  
志は角これくくくく茶文  
茶文

麻は書り谷くくくく書り  
時花乃行路くくくく  
恵くくくくくくくく  
夫の行直くくく  
東より時麻さくくくく  
時強くくくく乃時くくく  
耳之くく時書くくくく  
第小くく麻と羊女あゆくく  
時心くく花くくくく  
報くく

秋風や長も久し魚乃骨  
 阿まほのや高成なり置乃を  
 魚乃をさへをよみ葉よ浦乃秋  
 秋乃舟や子荒乃乃しけ破系  
 有ましの穂そよりあまき三日秋月  
 乃まきしに柄しにわたり葉柄乃  
 揚乃何らよももん申ふぬく(海)乃

九月

郎句 菊

葉九日迄大は旧秋  
 きよ乃葉古き世に秋乃乃  
 志乃葉花同く色よりも能く  
 花乃色も香もあわゆる葉一様  
 葉の白清見るとよ清ら  
 重乃舟りやもみれにやまきの家  
 山ささや板戸は色もく葉乃人  
 畑よりく表はなれり葉十種

此集小葉を初く集りて之を  
花一ツ葉一葉を辨妙に之を  
葉を以て志し世に人の傳へる  
つゝも亦甲申の年とて是を  
下しや葉を以て色を以て之を  
二の故に想ひ来りて葉を  
南山とて之を向りて之を  
るはまゝに之を以て之を  
酒買ひて之を以て之を  
志し葉を以て之を以て之を乃月  
年文

柳陰影のソリソリと何とて  
時世を辨し之を以て之を  
葉を以て之を以て之を以て  
葉を以て之を以て之を以て  
山路や松のソリソリと何とて  
葉を以て之を以て之を以て  
子世に傳へる古根も何とて  
花を以て之を以て之を以て  
乃月  
年文

おもむき自酒ふぬるの言を成らん 余文  
 ますまらうと本は陰講一後乃月、  
 川しくやも暮すゆくと好乃月 暮す  
 何れとれ子挽しきしゆり十三夜、  
 店の日すむじゆりゆりゆりある 啼き  
 矢作乃橋のとりし暮しをては津瑞橋  
 唯の曲をとてる子よまの日の名も新ま  
 人語より暮す  
 秋のをむはるしくかき一のまら月、  
 好乃月やあふよとらあゆむ痛より、

雲を  
 志しくと暮すまの境乃何ゆり、  
 秋のまは夜をたぐし暮す、  
 秋の暮るを利業を暮すのまは、  
 夜中  
 くらりりりよよ暮くく暮ハせ、  
 なまこりりゆんぢぢと暮る暮るが 暮る  
 麻糸の音の鳴く下る暮る、  
 暮る乃母来くワひる暮る、  
 家の棟を暮るよま何る暮る、

五の霜

高き葉乃枝より下りたる霜降る  
深き葉乃枝より下りたる霜降る

紅葉

何乃木と片糸所は皆紅葉  
深き葉乃枝より下りたる霜降る  
高き葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る

志らくくは清くく紅葉の日暮る  
高き葉乃枝より下りたる霜降る

紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る  
紅葉の葉乃枝より下りたる霜降る

柳

柳の葉乃枝より下りたる霜降る

葉の入りたる秋の風をさすふ熟柿が 葉を  
くろ親のたもとに成やうと熟柿が 葉を

栗

谷へ降りては清くも栗拾ひ  
るはりては破りては栗拾ひ

菜菔

しらべや菜菔をよきもふは解つる 味を  
菜菔は乃ちおれ志くおれを味方だ

木下

芝の産衣乃ち破れ木の葉を

葉をすくはるはうくもつりだ

松の葉 菌類

松のけの皮はさきく小片はたぐ

葉乃ちたぐはきくもたぐはきく

酒のまわらぬもきくは菌類

しきくもやうきくは木の葉を

秋の葉

やうきくもきくは秋の葉

小片はたぐはきくは葉

秋のくまきくは木の葉を

新尺さくり合梵海や秋の星る  
川秋や新秋はさくさくし  
とくくしと江戸新さくさくし秋の星  
山風や新秋の風さくさくし  
縁さくし秋の星さくさくし  
人乃さくし秋の星さくさくし  
秋の星さくさくし  
梅さくし秋の星さくさくし  
木母さくし秋の星さくさくし  
秋の星さくさくし

灯さくし秋の星さくさくし  
阿さくし秋の星さくさくし

雑

さくし秋の星さくさくし  
さくし秋の星さくさくし  
さくし秋の星さくさくし

十月

初冬

さくし秋の星さくさくし  
さくし秋の星さくさくし







多の田にさす時をいふなりしを昔の  
時を

とて成志

さしとす時を清くせむ乃成志也

空の河

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

妙義山

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

さしとすやと清くせむ乃成志也

霜

霜の風や雪のしほくも月一ツ  
 戸よりこもる入眉乃手あわが  
 寺くぬけ残さくもさのあわが  
 雪あふくもくぬけの花が  
 朴乃雪あもあまのさねや新朗  
 何れもなぐたのれをくまのあま  
 あ杖よりくぬけやあまのひん  
 雪あふくもあまのふ二軒あや  
 雪あふくもあまのふあまの葉が

一ツの雪のしほくも月一ツ  
 列あつきたる雪首のあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が  
 雪あふくもあまのふあまの葉が

雪あふく

芭蕉志

あけのけり けりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き

あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き

あけのけり

あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き

あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き  
あけのけりくちりい入る 城三人 嘆き

小春日

松の葉を赤くまき小まき入り  
魚つりの海を立寄る小まき  
海乃幸一と遠きこころを  
冬乃おのり入松乃白し

本枯

風や松をまきし所骨堂  
木々しや白をまきし月  
こころし中おまきし朽木が  
風小豆乃葉おまきし人お

唯志

風をまきし所骨堂  
木々しや白をまきし月  
こころし中おまきし朽木が  
風小豆乃葉おまきし人お

茶の苑

茶の苑をまきし所骨堂  
木々しや白をまきし月  
こころし中おまきし朽木が  
風小豆乃葉おまきし人お

帰心

風をまきし所骨堂  
木々しや白をまきし月  
こころし中おまきし朽木が  
風小豆乃葉おまきし人お

ワケもまふ志くまぬの聲本も  
しと校まこくやうやくしと  
行ふのく米橋作や之り  
新陽のこままを橋のまこく  
名と志まぬ本八程のし  
春の陽まをくしと木のこく  
まをこく

陽のまをこくしとくしと  
冬紅葉 春の紅葉  
風絶えくしとくしと

とみちをまをこくしとくしと  
りしとまをこくしとくしと  
相まぬまをこくしとくしと  
ぢくしとくしとくしと  
急まぬまをこくしとくしと  
汐風ぬまをこくしとくしと  
十ふまをこくしとくしと  
まをこくしとくしと  
まをこくしとくしと  
まをこくしとくしと

あまのこころをうらむ一すぢのりしあまのこころ  
あまのこころをうらむ一すぢのりしあまのこころ

あまのこころ

枯柳

柳のこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

枯

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

多枯

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

小町

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

枯

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころ

あまのこころをうらむとてあまのこころのりしあまのこころ

あまのこころ

枯尾を

中しくは根つてくありぬ枯尾を 嘆き  
阿つて火乃燃えくくうれ尾を  
あつ深ありく遠く枯尾を  
朽れく沙に入ぬまふくぬ 余文  
捨るはあくくく無くく尾を 夢を

枯尾

武を野路くくくくくくくくくく 枯尾を  
人通りくくくくくくくくくく 枯尾を  
棒くくくくくくくくくく 枯尾を

尾葉

まよはれくくくくくくくくくく 枯尾を  
くくくくくくくくくくくくくく 枯尾を  
めくくくくくくくくくくくくくく 枯尾を  
川中くくくくくくくくくくくくくく 枯尾を  
まよはれくくくくくくくくくく 枯尾を  
るくくくくくくくくくくくくくく 枯尾を  
尾葉  
嘆き 枯尾を  
くくくくくくくくくくくくくく 尾葉  
松乃りくくくくくくくくくく 尾葉





晴やけりてもたれとふ山夕  
親と子おしき世に流る楳の影  
松とてまきつるくまらる楳の影  
一 晴

極子溝

志しき溝やとて難波乃者市  
一町乃とていふ言とて志しき溝  
袴まきとて祿京人多し極子溝  
半とて中とて河津はらとて極子溝  
屋敷とて極子溝とて極子溝  
、 晴

細代さ

杉風や掃く河津とてはらとて  
細代さとてくはらとて極子溝  
とて掃くとて其の河津とて細代さ  
橋乃とて山とて極子溝の極子溝  
、 晴

表興川

花とて入とて掃く入や表興川  
表興川ありとて何とて山とて極子溝  
、 晴

鰯

世とてまきとて流るもとて極子の影  
海遠きとて極子の影とて極子の影  
、 晴



甲子やうの杉風はあふさきさき  
らつきしうや二階はなしくらさき

水鳥

あさね巴中からくねひり  
あさね乃さりほや流乃ね  
あさねやさねさるふすまき  
あさねやうは越く少田乃ね  
あさねやあさねの腹溜り

紅雲

松舟中子ゆくり一り

つゝきねり物さやうしん  
あさねはね中しんも並ん  
あさねさりゆねもゆり  
あさねとりしんも並ん

鴨

あさね鴨やたれあさね射  
あさね川やあさねはね鴨のね  
あさねさりしんも並ん  
あさねとりしんも並ん

鶺鴒

あさね鶺鴒はあさねさき

磐石くわや 嵐川河子みよき  
株乃葉とまらぬい出さうし  
竹伐の段くわくわく 足るま  
野社乃葉とまらぬし 熊野

倭 列考

文りや 列考の志きり 松の松  
文りや 列考の志きり 松の松  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ

嵐竈 炭

すまかまや 聖の徳乃 柏樺系  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ

火神 火神

まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ  
まらぬまらぬ 月もまらぬ

紙子 金長

いさく人乃 窮たしめふた 柳が 嘆き  
杖しきく人の 海よりけ 火梅  
金くさくく 家よと 顔の 大梅が 夢を  
舟よお 巨顔 又ゆめ 火梅が  
紙子 金長  
縫くめふ 寝ふあ けき 紙子が  
月ふく 粉の とも 紙子が 糸文  
さよま 初候の 文や 紙子 糸文  
さよま も 転廻きく 紙子 文金長 嘆き  
行ぬふく 紙子 糸文

紙巾

ふくく 雲つを 雲の 徳紙巾  
松金の 紙巾 吹き 山は 糸文

藩堂 綿

縁の や 車 通て 妹の 糸文  
波ふく 少母 糸文 藩堂が  
糸文 糸文  
さよま 糸文 糸文 嘆き

挨拶

糸文 糸文 糸文 糸文

まきくや水原ふらのさる水 夢うた  
新しき ことばを心

障子とよまわし 愧もけり 夕ぬの日 晴まを  
人目も秘も志の 後よ 夕陽の 影をまを

病中 夢  
いそがしき 夢や 夢の 破る 意の下 糸更

叶ふま  
さし 志し 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の

いそがしき 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の  
まき 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の

十一月

冬 夢  
晴まを

利少し 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の  
本ま 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の

りま 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の  
新まを

夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の  
新まを

今 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の 夢の









雪吹きし夜ふゆ中ふゆくし  
りし山ふゆく夜赤し一雪の夜  
雪のりや山毎ふゆく一日の朝  
雪ふゆくしりし山ふゆく月降  
雪のりや遠き人しりしりし  
雪吹きし夜ふゆ中ふゆくし

雪吹 海雪

白妙し旅人つとふゆくしりし  
海山ふゆく月降又ふゆく  
雪のりし人しりしりし  
梅つとふゆくしりしりし

雪吹 海雪

雪吹きし夜ふゆ中ふゆくし  
りし山ふゆく夜赤し一雪の夜  
雪のりや山毎ふゆく一日の朝  
雪ふゆくしりし山ふゆく月降  
雪のりや遠き人しりしりし  
雪吹きし夜ふゆ中ふゆくし

何れ破や玉らるるふとたひを何れも  
心ゆく位を命吹逃るふ言何れ乳  
つらふ人やま暮すはきくみそれ除  
笑はれ戸やまぬだりふ待乃上  
登乃糸糸のふようさねるみそれ  
麻糸もく

氷

湖やこぼるるく流るけいん  
まらまらや水の上乃粒小ふ

下ノ五十一

氷よりり崖たふれまきくゆの声  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま  
氷のこりり音も氷まふうま

薬喰

いんまらややまらとらして薬喰  
いんまらややまらとらして薬喰  
いんまらややまらとらして薬喰  
いんまらややまらとらして薬喰



唐草抄や云々後おまけの式に之れい 葉を  
 物々多ん多しやふふふふふふ 旭  
 朝初や 雁をさすまふ岩乃松  
 しかる多しやふふふふふふ 嘯  
 河の唐草や也の玉乃朝雲  
 露月 社来月  
 目下はくも木後ましくまふ  
 志を月や何れ山くも生く白  
 桐子多しやふ  
 松をさすまふ葉の言や社来  
 葉を

仙  
 仙やふふふふふふふふふふ  
 水仙や浮世小路乃玉す 後 嘯  
 雲先や留し 氷まふふ仙を 葉  
 葉をさすまふ 松をさすまふ 仙を  
 十二月  
 師毛  
 月一ツの葉つもふ汲志くふが 葉  
 松を月小松何れもふ師毛くふ

山信や師を乃果上言まらむ 宗文  
百姓の板戸をひれり志をんが 唯志  
川をくくと粟つく師を月暮か

編ハ

編ハや何とてくふ刻もろ 宗文  
編ハの瀬や佛は子く糖 〃  
編ハや服乃玉ぬきく 齋齋 〃  
編ハちや雪ま杖つく修一人 〃

宗念佛

酒をくは講中つまなく言ふ心伝

刺槍り戒ふしうん福子川 宗文

宗念佛 三月

宗念佛や四方を如く言ふ宗文 宗文

宗念佛く和漢行好山信宗 〃

宗念佛は鏡をくくまねめ 宗文

宗念佛は神をくくく 男山 唯志

宗念佛

宗念佛く八節もはるや言は柄 宗文

宗念佛や言をふくくはた乃上 宗文

宗念佛や信をくくく 唯志

年忌

ふいふーしてし事形もささる 晴

或は概制懐く

あつこくもささるく概ーくささる

お江とゆかむうー男や通さる

さやささる

概久乃概もさやささる

さやささるやもみも雪か中 宗文

糖掛

すくもささるや湯ささるささる川

餅橋

すくもささるやささる向ささるささる

ささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささる





俳諧發句三傑集下

卷下

松尾の樹をよみかへりし山

下ノ五十六

三傑乃名ありしこゝ家名名の  
 かきし世にありし世にありし世にありし  
 故人の何をももつた人もつた人もつた人も  
 しるしきありし世にありし世にありし  
 彼らをとらへし世にありし世にありし  
 あつた世にありし世にありし世にありし  
 ちりし世にありし世にありし世にありし

Handwritten text in a cursive script, likely a preface or introduction, written in dark ink. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be in a different script or dialect. The page is framed by a simple black border.

序

Handwritten text in a cursive script, continuing the preface or introduction. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be in a different script or dialect. The page is framed by a simple black border.



